

デフライフ・ジャパン株式会社 スタッフプロフィール

マシュー・スコット・ムーア (Matthew Scott Moore)



1958 年	アメリカ・インディアナポリス生まれ
1977 年	インディアナろう学校を総代として卒業
1983 年	ロチェスター工科大学 (RIT) にて社会福祉事業の学士号を取得。同大学の学部のひとつにあたる国立ろう工科大学 (NTID) でソーシャルワーカーのアシスタントとして働く傍ら映像の制作活動に精を出すとともに大学の劇団に所属。その演技で一躍注目を集めた
1984 年	独立系マルチメディア会社「MSM プロダクション」を設立
1987 年	『デフライフ』マガジンを創刊 (定期発行開始は 1988 年)。自宅の小さなダイニングテーブルから、当時では唯一、ろう者自身が執筆する独立的な立場の雑誌として発行を続ける (2012 年夏には創刊 200 号記念誌を発行)
2009 年 12 月	ハワイにて「日米デフ交流会 in ハワイ 2009」を主宰
2010 年 1 月	『デフライフ・ジャパン』を創刊
2011 年 2 月	『デフライフ・フィリピン』を創刊 (2013 年「デフライフ・カナダ」創刊予定)
2012 年 9 月	東京・渋谷に、ろう者による、ろう者と聴者をよりよい形で結ぶ架け橋を目指す企業「デフライフ・ジャパン株式会社」を設立
2012 年 11 月	創立 169 年を迎えるインディアナろう学校で初めて、卒業生の名前を冠する講堂「マシュー・スコット・ムーア・オーディトリウム」がオープンを迎える

ろう社会の現状を広く発信し、ろう者と聴者、双方にとってよりよい社会の実現に貢献し続ける功績が認められ、国立ろう工科大学、ギャローデット大学他から多数の賞を受賞。その活動は国内にとどまらず世界規模となっている。

中でも日本に対する興味と愛情は深く、2006 年の佐藤との出会いをきっかけに、以後、毎年 2～3 回ほど来日。先進諸国の中で福祉が遅れている日本のろう者の現状を知り「必要なのはろう者自らが動き、社会を変えること。日本のろう者のために力を貸したい」と考える。

さらに「日本にいる時は日本手話を使って日本のろう者と対等にコミュニケーションしたい」という信念のもと、母語であるアメリカ手話に加えて日本手話を修得。日本を象徴する魚である鯉が大好きで、デフライフ・ジャパン社の設立にあたっては、自らデザインしたロゴマークに鯉のモチーフを採用している。

日本とアメリカ、そして諸外国を行き来する生活の中、余暇は映画鑑賞 (お気に入り「ブレードランナー」「乱」)、ユニークな鳥かごの収集などに費やされる。

今後の夢、目標は日本でろう学生のためのインターナショナルスクールや大学を設立すること。そして、ろう者が主役の街「デフ・タウン」をつくること。

佐藤八寿子



サインネーム「GERO」。1972 年 仙台出身。

ろうの家族に生まれ、宮城県立ろう学校（現・宮城県立聴覚支援学校）卒業後、就職のため上京。加古帯裁縫所に入社し、仕立ての技術を身につけながら聴者と共に寮生活を送る。並行して日本手話の教授法（NA 法）を学び、新宿区での地域活動を経て地元仙台的専門学校等で手話指導を行い、日本手話の普及に尽力。

手話指導と同時に 1996 年、帯仕立屋「趣味の帯」を設立し技術を活かした活動も行う。

2006 年、ろう者に関する映画制作の企画ミーティングで訪れたハワイにおいてマシュー・S・ムーアと運命的な出会いを果たす。国境を越えて広く現代のろう社会について真剣に考え、行動するマシューの姿に感銘を受け意気投合、『デフライフ』誌の日本版発行を決意。

2008 年 3 月、「デフサトウエンタープライズ（DSE）」（東京都目黒区）を設立。手話翻訳指導、年配ろう者の手話読み取り指導、DVD 等の制作・出演、ろう被爆者証言 DVD「ヒロシマ」の発行、手話教本への出演など、精力的な活動を続けながら『デフライフ・ジャパン』誌の発行準備に奔走する。

2010 年 1 月、ろう者が書記日本語でつくる雑誌『デフライフ・ジャパン』創刊、編集長に就任。

2012 年 10 月、マシューと共に「デフライフ・ジャパン株式会社」設立。国内でもめずらしい、ろう者による、ろう者と聴者のよりよい関係づくりや、ろう社会への有益な情報発信などを行う企業として、これまで以上に幅広く、力強い活動を目指す。

私生活ではシングルマザーとして 4 人（1 男 3 女・うち下 2 人は双子の女の子）の子どもを育てる母親。その他家族はネコ 3 匹。家族全員（ネコ以外）ろう者というファミリーながら、明るく笑い声の絶えない“賑やかな”家庭を築いている。

毎日本屋をのぞかないと気が済まないほどの本好き。多忙な日々の中、貴重な憩いのひとときとなっているのが晩酌タイム。特にワインを好み、子供たちが成人して乾杯できる日を楽しみにしながら、今のところは毎晩のひとり酒を楽しむ。

座右の銘は「歩くから道になる。歩かなければ草が生える」（相田みつを）。

松下玲子(聴者スタッフ)



1968 年 東京生まれ。5 歳から大阪へ。10～15 歳をマレーシア、クアラ・ Lumpur で、16～17 歳をアメリカ、ロチェスターで過ごす。

1990 年、青山学院女子短期大学卒業後、全日本空輸キャビンアテンダントとして国際線に乗務し、世界各国を訪れる。

全日空退職後、子供英会話スクール講師、ブライダルコーディネーター、翻訳会社で翻訳コーディネーター、翻訳営業として職歴を重ねるかたわら手話を身につける。

地域でボランティア活動をしている母を介して佐藤と出会い、日本語、英語、日本手話を使いこなすマルチコミュニケーターであることから『デフライフ・ジャパン』誌にて創刊時から記事の翻訳に携わる。

2012 年 6 月、デフライフ・ジャパン社設立の準備段階から、唯一の聴者社員として入社。ろう者スタッフと聴者の世界を結ぶ人材として、マーケティング、広報、手話教室の事務、聴者社会との交渉など広範な業務を担当する。

子供の頃、当時は娯楽の少なかったマレーシアで家族の楽しみだった映画鑑賞の際“英語のシャワー”を浴びた。現在、デフライフ・ジャパン社に入社したことで“手話の滝”に打たれる日々。実社会とは逆にろう者が圧倒的多数を占める社内で完全なマイノリティという立場にあり、手話能力の不足によるコミュニケーションのハンディに悩むことも。それが改めて実社会に生きるろう者の立場、その不便や苦勞を自分のこととして感じる機会となっている。

私生活では、佐藤と同様に高校 2 年生の娘を持つシングルマザー。趣味は海外旅行、映画や海外ドラマ鑑賞、そして読書。

好きな場所は慣れ親しんだマレーシアや全日空勤務時代に乗務で訪れたオーストラリア、シドニーなど。映画と海外ドラマ鑑賞も大好きで、内容とともに制作過程や舞台裏、キャストやスタッフが語るエピソードなどに興味をそそられる。今はまっているドラマは『グレイズ・アナトミー』。また、娘と一緒に本を読み、ドラマ化するにあたっての“エア”キャスティング会議を行うのが最近の楽しみのひとつ。

以上